九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

一九三〇年代の北京における日中学術交流研究

稲森, 雅子

https://hdl.handle.net/2324/4059959

出版情報：Kyushu University, 2019, 博士（文学）, 課程博士
バージョン：
権利関係：Public access to the fulltext file is restricted for unavoidable reason (3)

氏　　名　：　稲森　雅子

論 文 名　：　一九三〇年代の北京における日中学術交流研究

区　　分　：　甲

論　文　内　容　の　要　旨

本論文は、いわゆる日中戦争前夜とされる数年間の、北京において繰り広げられた日本と中国の中国学研究者たちの学術的な交流とその意義について考察したものである。

本論文の標題にいう「一九三〇年代」とは、実際の年数とは少し異なり、厳密にいえば蒋介石による南京国民政府の樹立（1928.10.10）の後から盧溝橋事件（1937.7.7）までを主な研究対象期間とする。また、地域名を「北京」とするが、実際には中華民国の首都が上述の 1928 年 10 月の政変で南京に移ったため、この当時の公式の現地名は「北平」である。ただし、当時の日記や旅行記、また後年のさまざまな回想録中においても、往々に「北京」の通称が表記として多く散見されるため、本論文の論述部分においては、基本的に「北京」を用いることとする。

序章「一九三〇年代の北京」では、本論の前提として当時の旅行記や留学経験者（吉川幸次郎・小川環樹ら）の回想談により、この時期の日中関係や北京の街区のようす、そして学界の状況等について概観したものである。この時の北京は、政治や経済、そして軍事的紛争からも少し距離をおいた都市であり、言わば忘れられた「古都」ではあったが、いまだ北京大学や清華大学など数多くの大学が残っていたため、学術研究の面では依然として中心地としての環境が残されていた。また、1910 年代後半に起こった文学革命以来、戯曲や通俗小説分野の研究が本格的に開始され、相継ぐ貴重な版本の発見や、欧米の文学理論を取り入れた新しい中国文学研究の萌芽期にあったことを論じた。

第 1 章「一九三〇年代の北京古書肆――目加田誠留学日記『北平日記』から辿る――」は、このとき北京に留学していた目加田誠（1904～1994）の日記から、当時の北京において営業していた古書店に着目し、古書店主たちの活動と日本の研究者との関係を考察した。1911 年の清朝の終焉以後、大量の漢籍が北京の古書市場に流れたが、その主な顧客となっていたのが日本から来た研究者や留学生たちであった。中でもその中核的存在の古書店であった来薫閣と文奎堂について、日本に残る幾つかの文献資料からその実像に迫った。

第 2・3 章は、北京大学教授馬廉（1893～1935）と日本学術界との関わりについての考察である。魯

迅の後任として北京大学中文系に招かれ、中国の戯曲・小説を研究していた馬廉は、倉石武四郎（1897～1975）や長澤規矩也（1902～1980）らと頻繁に交流しており、中国の戯曲や通俗小説の版本についての書誌学的な知見を互いに高めあっていったことを明らかにした。また後の第4章に述べる孫楷第『中国通俗小説書目』の編纂は、そもそも馬廉の草稿が、その成立の端緒となったことを明らかにした。そして第3章「九州大学蔵『支那小説戯曲版画集』編纂考」は、本学が所蔵する二組の写真集『支那小説戯曲版画集』についての考察である。全200枚におよぶ写真は後に長澤規矩也によって『明清間絵入本図録』の書名で公刊されたが、当初その撮影を思い立ったのは、馬廉と倉石武四郎であること、また中国では鄭振鐸『挿図本中国文学史』（1932年12月刊）の図版としても使用されたことを明らかにした。

第4章「孫楷第の中国小説書目編纂と日中の学術交流」は、書誌学者孫楷第（1898～1986）の日本への調査旅行から小説目録完成までの過程を論じた。彼は日本に残存する貴重な中国通俗小説の目睹調査のため1931年9月に来日した。そのまさに東京駅到着の前夜に満州事変が勃発したのである（9月18日柳条湖事件）。多くの中国人があわただしく帰国する中、孫楷第は案内役の長澤規矩也と話合って残留を決意、驚くべき過密スケジュールで調査を敢行した。彼のこの壮挙を支えたのは、長澤規矩也をはじめとする多くの旧知の日本人研究者であり、また傅増湘や銭稲孫など北京の学術界の厚い信頼であったことを明らかにした。

第5・6章は、中国における日本語研究の第一人者であり、はじめて『万葉集』や『源氏物語』の中国語訳を行ったことでも知られる銭稲孫（1887～1966）についての考察である。まず第5章「銭稲孫の日中学術交流――日中戦争までの足跡――」では、銭稲孫の生い立ちとその豊富な海外経験、そして彼の篤実な人柄などを、彼が岩波茂雄（1881～1946）に宛てた書簡や、新発見の目加田誠『北平日記』などから考察した。そして第6章「銭稲孫の私設日本語図書室『泉寿東文書庫』」は、銭稲孫が自宅に開設した日本語書籍の図書室についての考察である。彼は1930年元旦にこの図書室を開き、日本人の有識者たちから寄付を募って、わずか1年半で4000冊を超える日本の書籍を集めた。また機関誌『字紙簍』を発行するなど（現在その原本は東洋文庫に所蔵）日中の学術交流の架け橋として精力的に活動し始めていたのだが、残念なことにこの私設図書室は翌年9月の満州事変により閉鎖を余儀なくされた。しかし、図書室設立の経緯などを内藤湖南宛書簡（関西大学所蔵）や、新発見の「泉寿東文書庫創立趣意書」（神奈川県二宮町の徳富蘇峰記念館所蔵）などから具体的に明らかにすることができた。

結論「一九三〇年前後の日中学術交流から見えるもの」において、本論文に取り上げた主要な人物たちを改めて振り返ると、彼らは、日本と中国とで、その後（＝戦後）まことに対称的な人生を歩んだことがわかる。日本側の倉石、長澤、吉川、目加田、小川らは、戦後の学界の牽引役となり、それぞれの分野で数多くの先駆的な業績を残した。一方、中国側の人々は、新中国成立後の激動の中で、ある者は政治的偏向を余儀なくされ、ある者は厳しい迫害にさらされた。この戦後の日中両国の歴史的な亀裂のために、この一九三〇年代の北京での学術交流は、重要であるにも関わらず、今日に至るまでほとんど顕彰されることが無かったのである。